



踏基のHPに掲載し「愛顧の二作品は「横濱-JAZZ Age」 「奇妙な喫茶店」と改められ、この度(株)文芸社より帯と装丁も新たなハードカバーに変身し、タイトル「奇妙な喫茶店」で、全国配本上梓の運びとなりました。此処に皆様にご報告して感謝申し上げます。今後はどうぞ、ぜひとも(株)文芸社より発売の書籍を、書店にてお買い求め下さい。第八回、直木賞作家の大池唯雄を父に(本名小池忠雄)、NHK歌壇選者としてこれまた活躍中の、現代短歌界の重鎮小池光氏より、縁あつて巻頭の序文戴きました。誠に身に余る光栄と感謝申し上げます。初版本「奇妙な喫茶店」は、特に末永くご愛顧戴ける一冊となるかと存知ます。「奇妙な喫茶店抄」あらずじとさわりをピックアップにて、紹介致しますので「笑読下さい」。

あらずじと解説

著者の多方面に渡る豊富な知識と、柔軟な想像力が光るミステリー仕立ての作品だ。信州に四代続く医者の家系

に生まれた雅夫は、松本の喫茶店「まりも」で少女に導かれて時の流れを遡つて彷徨う。そこから家系の秘密が暴かれていくのだが、伏線が巧みに張り巡らされてミステリー的な雰囲気を感じ上げていく。無精子症の父、曾祖父・善二郎とその妻・ジャンヌのドイツでの恋、叔父の雅次郎の抱える秘密、高度生殖医療の世界で野望を抱く女医のシルヴィア 信州の山奥の神秘を背景に、丹念に物語の中に織り込まれていく人間模様は目もくらむほどに妖艶である。本作においては、目利きの読者をも唸らせるであろう斬新な発想と、正確な資料調査に基づいたノン・フィクション的要素を高く評価したい。(文芸社編集部)

信州のA村の宇崎雅夫は、架空の時を駆ける能力を有する少年であった。SF小説描くところのタイムマイシンに乗って時空を旅するタイムトラベラーではない。的確に表現出来ないが、幻覚催眠状態で過去を徘徊できる

能力とでも言い直すべきかもしれない。ある音楽とある絵を前にしていると、ふいに自分が別の時空間にいるような、空想や錯覚を覚えるのは誰でも経験するところであるが、雅夫の場合は今と昔を映す、会わせ鏡の虚と実を一種の幽体離脱のような感覚で往復できたのである。

雅夫は、父善朗が無精子症だったため、凍結保存の精子を使った母の人工授精で生まれた子供である。あらゆる不妊治療を施しても、両親はなかなか子宝に恵まれなかったからだ。母は、叔父雅次郎の助言もあり優秀な子供を願って、知人を頼りドイツの産婦人科医の門を叩いたのであった。叔父は宇崎家四代目の診療所の医者で、生命工学の外国文献も少しは読んでおり、知人に人工授精の専門家もいたので、母に対する助言は適切だった。もちろん雅夫はその出生の秘密を知る由とてなかったが、容貌は少し日本人離れしたところがあった。

宇崎雅夫の家は、A村でも旧家として知られていた。先祖は、生粋の信州土着民ではなく山岳信仰の修験者(山伏)の傍ら、日本のチベット上州のM村からA村に移り住んだ、天保三年(一八三二年)生まれの薬師(くすし)であったという。何故、上州の修験者が信州に流れて来たのかは定かではない。東洋医学の漢方の術者としての先祖は……

実は女医シルヴィアは、日本語が頗る堪能だった。ドイツで医学を勉強した後、三年程信州滞在の経験があったからだ。周到に準備してきた信州縁の精液ドナー検体に、クライエントとなる非配偶者間人工授精AID希望の信州女性が、自分の前に現われてこようとは・・・思いもしない幸運に女医シルヴィアは、興奮を隠し切れない程感激していた。正に、研究の成果を試す千載一遇の好期が訪れようとしていたからだ。

採取された善十郎と雅次郎の精液が洗浄され、保存剤とともに液体窒素でマイナス一九六に冷凍保存されていた。理論上は百年でも二百年でも保存は可能だといわれている。二人の精子にダメージはなく、新鮮精子の授精能力となんら変わることはなかった。雅次郎の精液が採取されたのは、念のためであった。従って善十郎と雅次郎の二人の精子をドナーとして、信州女性の子宮に注入して行う単純な非配偶者間人工授精AIDが女医シルヴィアの最初の構想であった。女医シルヴィアは、この構想を一步すすめた野心的な凍結受精卵による人工授精を企んだ。自らの人体実験による試み、それも排卵誘発剤を自ら使い、両方の凍結精子を解冻し、顕微鏡下で自らの卵子と受精させた受精卵を各々五個、計一〇個保存準備していたのだ。それを代理母となる信州女性の子宮に回数を分けて注入し着

床を狙った。善十郎と雅次郎の女医シルヴィア間の受精卵、確実を帰して胚盤胞にまで育てた卵細胞を用い、しかもその信州女性の子宮を借りて自らの子を出産させよと・・・そんな大それた高度生殖医療の試みであった。つまり着床の成功を帰すために受精卵を五、六日まで培養して、良好な胚盤胞まで育て上げたものを女の子宮に二回に分けて注入した。

自らの遺伝子を伝える女医シルヴィアの野心的な実験はこうしてまんまと成功し、宇崎雅夫が、この世に誕生したのである。

つまりこれで遺伝子情報は、曾祖父から孫の善朗を飛び越して一挙に曾孫に伝わったのである。あるいはそれは雅次郎の遺伝子情報であったかもしれないのだが・・・父母も雅夫自信も知る由とてなかった。四代目医師雅次郎は密に気付いていたのではあるまいか。こうまでして、高度生殖医療の実験を試みた女医シルヴィアの凄まじい執念は一体何だったのであるのか。

話は、叔父雅次郎の葬儀の日に遡る。

しめやかに通夜が営まれ、身内の者が交代で、祭壇の蝋燭と線香を切らさないように気を配った。雅夫は、雅次郎の遺体を安置している仏間をひとり離れて緑色に塗られた診療所の鏡の前にいた。未明に何か上空から目映い金色の光が差仕込んできたよ

うに思えた。診療所の大きな鏡にその光が届けられると突然変化が起こった。

大きな鏡の中に、モディリアーニの恋人のジャンヌ・エビユテルヌの肖像画が映っていた。鏡の反対側の壁には、善十郎の愛蔵のモディリアーニの絵が幾つか掛かっていた。当然鏡の中には雅夫の像も映っていた。その肖像画の少女は、何時の間にかスリと着ている衣装を脱ぎ捨てた。まるで鏡の中に雅夫がいるのも気付いていないようだ。それは、まるで雅夫の空想が彼女を無から創りだして裸にしたみたいだ。雅夫はこの情景を過去に一度だけみたような気がしている。それもその記憶を長いこと覚えていた。雅夫が始めてみた生身の裸の女性だった。女は自分が裸であることを気にしない様子で愛想が良く、優しく親切に緑の部屋に誘うと、一生懸命雅夫が童貞を失うのを手伝ってくれた。でも長い苦悩と言った感じで、終わりに至っても快感を感じることができなかった。この経験も、また生物の営みに浸り、種の保存にかかわる実験のようなものだった。雅夫が飢えていたものがこうしてあつけなく終わった・・・

前で身支度を整えた雅夫は、その鏡の隅に書かれた赤い小さな文字を見付けた。その文字は微かに「see」と読めた。

続く